

## ジオツアー三島宿：東部支部活動報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 増島, 淳 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00024707">https://doi.org/10.14945/00024707</a>

# ジオツアー三島宿 (東部支部活動報告)

増 島 淳

## 1. はじめに

川勝県知事の肝煎りで始まった「伊豆半島ジオパーク」構想が進行している。東部支部も側面から応援するために、2010年から巡検会に会員外の方々の参加を積極的に呼びかけている。巡検会後のアンケートから、見学地や説明に地域の歴史等も加えれば興味・関心が増し、参加しやすい事を確認した。そこで2011年5月に「北伊豆地域に分布する凝灰岩と人間の関わり」と言うテーマで、各種凝灰岩の露頭観察に加え、凝灰岩を利用した横穴式古墳や海軍特攻隊基地跡の見学を実施し、十分な手応えを得た。

今回は三島市内観察会を考え、三島市立郷土資料館長・鈴木敏中氏の協力で「ジオツアー三島宿」を企画した。三島市街と周辺地域を3地区に分け、地質、地形、歴史、北伊豆地震の爪痕などを、それぞれ1日かけて見て歩く内容である(図1)。東部会員には案内のハガキを出し、一般の方々には、三島市・市教委の後援を得て、市の広報誌で参加者を募り、2011年9月～11月に実施した。毎回20名の定

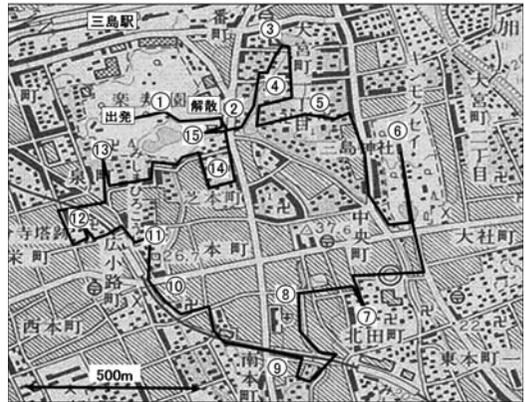


図1. 「ジオツアー三島宿1」見学コース (国土地理院2.5万分の1地形図 三島)



図2. 「ジオツアー三島宿2」見学コース (国土地理院2.5万分の1地形図 三島)



図3. 「ジオツアー三島宿3」見学コース (国土地理院2.5万分の1地形図 三島)

員をオーバーしたので、12月～2012年2月に再度実施し、参加者は延べ200人近くに達した。以下に第1回目の概略を報告し、第2・3回についてはコースと参加者数を示し（図2, 3）、当日配布した資料のうち主な2枚を図4, 5に示しておいた。

## 2. 観察会の内容

「ジオツアー三島宿1」（三島市街地の観察、約6時間）。9月24日（土）、参加者24名（会員、加藤・山本・増島、再実施12月3日、参加者32名、会員、工藤・浜田・三田・増島）。

案内者：増島淳，加藤雅功（会員），鈴木敏中。説明内容は、地形・地質に偏ることなく、市内の名所・旧跡も積極的に取り入れ、特に江戸時代、すらすら言えば箱根関所をフリーパスできたと言われる「三島七石・八小路（3回で全てを歩く）」などを見学しながら案内した。以下に記載する内容は、地図にマークした番号に対応する（図1）。



図6. 出発前の説明の様子

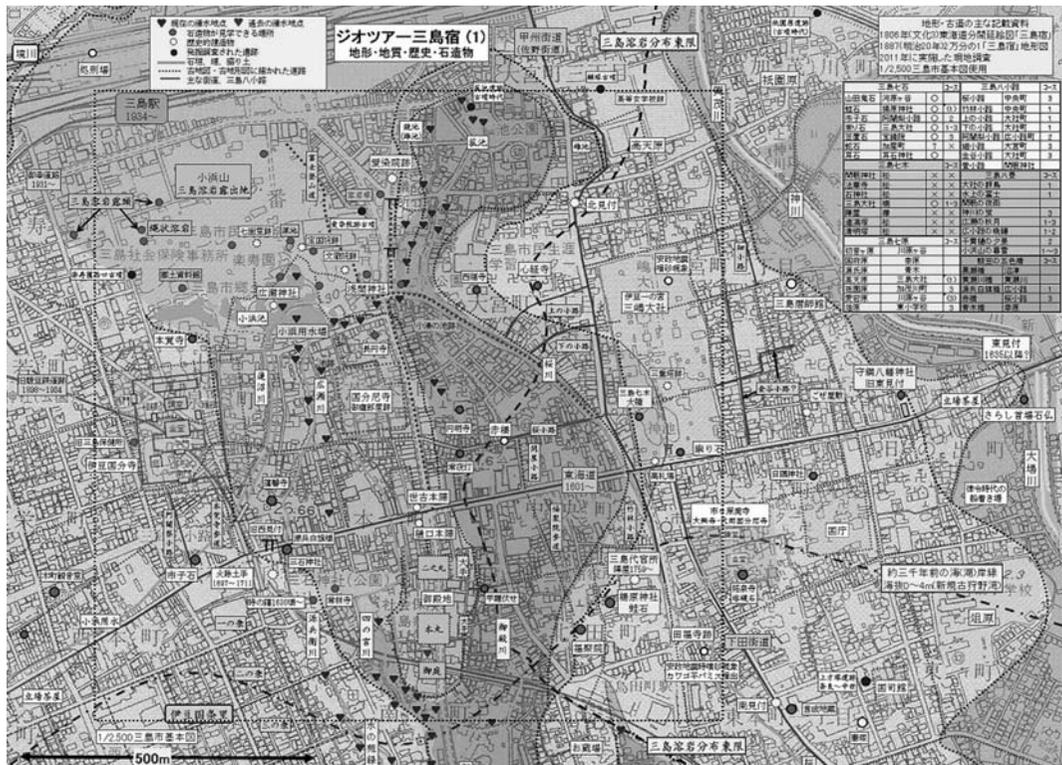


図4. 「ジオツアー三島1」の資料地図  
2千5百分の一三島市基本図 E-1, 2, F-1, 2 を改変。



察し、三島溶岩の特徴や溶岩地形について説明。楽寿館前の石切場跡（深池）で溶岩層が複数重なっている事を確認（図7）。

(2)：楽寿園東側の「白滝公園」で小型溶岩塚を観察し、表面の割れ目の特徴から溶岩の流動方向を推定する。湧水が溶岩の隙間から湧き出ているのを観察し、湧出機構を説明。

(3)：「菰池公園」で、「湧き間」を観察。周辺の湧水によって作られた地形を説明。

下記の(4)への移動中、民家の塀が、現在の伊豆半島内で唯一稼働している凝灰岩石切場産の「若草石」である事を説明。

(4)：三島市のご厚意で「市立図書館屋上」へ登り、周囲の諸火山の名称、活動の順序、第三系の火山堆積物からなる山地との地形の比較、湧水低地の俯瞰などを観察・説明。

(5)：三島八小路の一つ、「上の小路」にある「心経寺」にて、寺の歴史を説明した後、大井凝灰角礫岩製の塀や、きれいに成形された三島溶岩製の鐘楼を観察。

(6)：「三嶋大社」の歴史を説明。玉垣や境内の敷石の種類、社殿の礎石（長岡凝灰岩）、石燈籠の由来や石材（三嶋大社の場合は諸国の大名が奉納したため外来のものがある）、北伊豆地震(1930年)等による破損と修復の痕跡（増島, 2012）を説明。昼食・休憩。

(7)：湧水河川による浸食地形を観察しながら進む。「楊原神社」の由来を説明後、三島溶岩製の鳥居、長岡凝灰岩製の石燈籠（地震による破損と修復）、御殿場泥流中の巨石を利用した手水石や三島七石の一つ「蛙石」を観察（図8）。

(8)：湧水河川が作った三島低地を進み、江戸時代初期に徳川家光が宿泊するために作られた「三嶋御殿」の敷地や地形の特徴を説明。当時の石垣（三島溶岩）に沿って移動。

(9)：「三嶋御殿」南端低地で自噴する湧水群を見学。地形から地下の溶岩分布を推定。

(10)：「三ツ石神社」では、旧西見付跡（地形との関係）、源氏白旗橋跡、灌漑のための人工河川「源兵衛川」、「時の鐘」、「火除け土手」等について説明後、神社の名称が御殿場泥流中の巨石に由来している事や、境内にある石燈籠（地震による破損と修復・高遠系の石工が作る）と鳥居（長岡凝灰岩）等を見学（図9）。

(11)：「蓮馨寺」では、俳聖・松尾芭蕉と当寺の関係を説明後、廃仏毀釈によると思われる頭や顔の削られた長岡凝灰岩製の石仏群を見学。



図7. 楽寿園内の溶岩塚断面で三島溶岩の特徴を説明



図8. 三島市役所横、楊原神社で玉垣（長岡凝灰岩）・石燈籠（長岡凝灰岩火袋は北伊豆地震で壊れ作り直されている）・鳥居（三島溶岩）



図9. 三ツ石神社で石燈籠や鳥居の説明



図10. 伊豆国分寺塔礎石（御殿場泥流中の巨石）

(12)：「伊豆国分寺」では、七重の塔礎石（御殿場泥流中の巨石を利用）を見学、周辺に散乱している当時の布目瓦が伊豆の国市・花坂産である事を説明（増島，1997）。伊豆国初代代官の墓石や玉垣（長岡凝灰岩）を観察。寺域に置かれた石仏群の内容から、江戸時代の神仏混淆の様子を知る（図10）。

下記(13)への移動中、「初代三島保健所」で江ノ浦白色凝灰岩製の塀を観察。伊豆国分寺の経楼跡・鐘楼跡・金堂跡などを歩き、伽藍配置を説明しながら進む。

(13)：伊豆国分寺・僧坊跡に立地する「本覚寺」境内・七面堂前の石燈籠（長岡凝灰岩）を観察。この石燈籠が江戸時代後期に描かれた「東海道分限延絵図」に載る事、高遠石工作である事、楽寿園から移築された経緯、地震による破損の様子などを説明。

(14)：「長圓寺」の寺域周辺が伊豆国分尼寺跡である事を、微地形や古代瓦の散布状況から説明。寺の石蔵が大井凝灰角礫岩製である事を説明。

(15)：「浅間神社」境内の湧水を観察。溶岩塚を削って社殿が建てられている事を説明。

8基の石燈籠が全て長岡凝灰岩製である事や、地震による破損・修復状況を確認。大部分の石燈籠が、江戸時代には宿場の辻に置かれた常夜灯であったが、時代の変化により、当神社に移築された事などを竿・礎石の記載内容から確認。

（解散）、15：30 楽寿園東門前でアンケートをとり、解散する。歩行数約1万歩。

### 3. まとめ

今回の観察会で一般参加者に気付いてもらうため配慮した事項を以下にまとめる。

(1)：各所で観察した石造物は、大部分が近在の石材を利用している事。石造物の種類により石材が異なる事。石材により利用した時期に違いがある事。石燈籠は殆ど全てが北伊豆地震で倒壊破損・修復されている事。

(2)：三島市街地の中心部は湧水河川が作る低地であり、北伊豆地震による家屋の被害が、ここに集中している事（全壊率は旧三島町全体では11.5%だが、三島市西部の御殿場泥流上1.8%、湧水低地20.3%）。地震対策は個々の地質・地形によって異なる事。

(3)：御殿場泥流中の巨石が湧水低地から、神社・寺院に集められ利用されている事。

(4)：地形・地質からの観点も合わせ、三島の歴史をより深く知る事により、郷土を愛する心を高めてもらおう事。新しい知識を周囲の人々に広めてもらう事。

6回のジオツアーの参加者は、東部会員、実数7名（延べ数26名）。一般の方々は実数84名（延べ数145名）であった。

会員への案内ハガキでは実施内容を十分に説明できなかったためか、社会科見学と判断し、不参加の方もおられた。

一般の方は積極的な参加者ばかりで、今まで各種団体が実施した地域見学会は歴史中心であったため、地形や地質に重点を置いた説明は非常に新鮮に感じられた様だ。過去の見学会で見落とされていた場所や建造物に新たな価値が見出され、地域を愛する心がより強くなったものと思われる。6回のジオツアー終了後、再実施を希望する声が多く、3月と4月にコースを変え実施した。

参加者の中には、三島ガイドの会（観光客に無料で三島市内を案内するグループ）やグランドワーク三島（主に三島市の自然環境を守る会）のメンバー、伊豆半島ジオパーク推進事務局の方もおり、今後これらの方々を通して、市内に存在する多数の石造物についての新しい価値観が、より多くの人たちに広がる事が期待される。

本会東部支部の活動（会員を対象とした巡検中心）は、見学場所や内容が手詰まり状態にあり、会員の高齢化も進み、巡検参加者も特定の方に限られている。

一般の方々は、毎日の様に報道される「地震・津波・噴火」等について、居住する地域を例にした、具体的で正確な「地学的情報」を渴望している。

本会をさらに発展・継続させるためには、会則の冒頭に記載されている「地学教育の普及」にも重点を置き、会員が協力・工夫して本会を運営して行く必要があると感じている。

今回のジオツアーでは、予備調査で山本玄珠会員のご指導を受けた。実施中には浜田俊・工藤周一・加藤雅功・三田義和の各会員から、説明・運営に協力していただいた。ここに感謝の意を表し終わりとします。

## 引用文献

増島 淳（1997）：県東部地域の古寺院出土瓦の産地について。静岡地学，76，13-20。

増島 淳（2012）：ジオツアー三島宿の成果(1)石燈籠・境川が涸れた時期・三島宿の古道。三島市郷土資料館研究報告5，三島市郷土資料館。

三島市誌編纂委員会（1959）：三島市誌上・中・下巻。三島市教育委員会。

高橋 豊（1996）：伊豆長岡町史上巻。伊豆長岡町教育委員会。